

英語を用いて表現し、自分らしく

コミュニケーションを図ろうとする子どもの育成

小 学 校 和田 清寛、川口ローラ

研究協力者 池野 修、立松 大祐(愛媛大学)

1 主題設定の理由

前期研究において、「国際交流を楽しみ、英語を用いて自分らしく表現できる子ども ―コミュニケーション力の育成―」を目指して、授業実践を重ねてきた。

近年の急速なグローバル化により、異文化や多言語の人たちとのかかわることが増えてきている。日本においても、ラグビーワールドカップ2019日本大会では、それぞれのキャンプ地で日本を訪れた海外選手と交流をしたり、海外選手が台風被害のボランティア活動を行ったりするなど、外国の人とのかかわりが見られた。このように、日本で生活するだけでも、異文化や多言語を持つ人々との共存の必要性を高めており、外国語によるコミュニケーションは、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定されている。

小学生の発達段階においては、外国の人と望ましい関係を築いていくために大切なことは、外国の文化等に対する知識・理解に加えて、①外国の人と進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育成したり、②相手を尊重したり、③外国の人に対する苦手意識や心のバリアを作らないようにしたりすることであると考えている。

外国語活動や外国語科においては、外国の人との交流学习に向けた活動を行い、目的や相手意識を持って英語に慣れ親しむ学習を行ってきた。また、くすのき学習【国際】では、外国の人との交流学习の機会を保障し、外国語(英語)を用いながら、外国の友達に絵手紙を書いたり、外国の人に来校してもらったり、インターネットを利用して外国に住む同年代の子どもと話したりするなど、コミュニケーションの楽しさを味わうことを大切にしてきた。そうすることで、子どもは外国語をコミュニケーションの手段の一つとして用いながら、外国語を意欲的に学ぶ姿が見られた。

しかしながら、子どもたちを取り巻く環境は、学習塾や習い事に通うことで多忙化し、友達との遊びを通じたコミュニケーションの場の減少や少子化、核家族化、また、SNSの普及によるコミュニケーション不足などが懸念されている。

今期研究では、前期研究を踏襲し、外国語活動・外国語科の授業を、外国との交流学习に向けた活動だけでなく、一番身近な異文化である友達とのかかわりを大切にしていきたい。様々な考え方を持った友達と英語によるコミュニケーションを大切にしたい学習を行うことで、「自分のことが友達に伝わってよかった」「友達のことを知れてよかった」「友達のことをもっと知りたい」「他の人はどうだろう」という気持ちを高め、子どもたちに豊かなコミュニケーションを行うことのできる資質・能力を養いたい。

そこで、「英語を用いて表現し、自分らしくコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成」を主題とし、コミュニケーションを図ろうとする態度を育成することが、これからのグローバル化社会を生きていく子どもにとって大切であると考え、本研究主題を設定した。

2 くすのき学習【国際】（外国語活動）・外国語科における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐ『くすのき学習【国際】（外国語活動）・外国語科』の授業づくり

ア くすのき学習【国際】（外国語活動）・外国語科における『深い学び』とは

くすのき学習【国際】は、外国語活動と外国語科を総合的な学習の時間及び特別活動と合わせて合科的に扱っている。そのため、「話すこと」「聞くこと」においては、言語や文化についての体験的理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成、外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ及び、活用等がねらいとして求められる。その上で、異文化を持つ人との出会いを大切にしながら、コミュニケーションを図ろうとすることが非常に大切であると考えている。そこで、くすのき学習【国際】で育てたい資質・能力を、①異なる文化を持つ人（外国の人、友達）とかかわるよさや楽しさに気付き②外国の人や文化に興味を持ち、外国の人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度とする。また、教科等の枠を超えて汎用的に働く資質・能力を「コミュニケーション力」と捉えている。

子どもたちは、異文化を持つ人との出会いに期待感を持ち、心を動かしながら意欲的に学習に取り組む。コミュニケーションを図る基礎（素地）となる資質・能力を育成する場面（外国語活動・外国語科）では、具体的な場面等を設定し、外国語を用いて、互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を重視する。外国語を通して、改めて友達のことを知ったり、自分のことを見詰め直したりすることから、自信を持ってコミュニケーションを図ろうとする態度を育て、異なる文化を持つ人との交流への意欲を持たせる。そして、身に付けた力を生かし・発揮する場（くすのき学習【国際】）では、具体的な課題等を設定するなどして学習した語彙や表現等を実際に活用する活動を充実させ、言語活動の実質化を図る。これらにより、英語で自分のことが伝わってよかったと体感させるとともに、交流相手を通じて日本や自分自身について再発見させる。

そこで、くすのき学習【国際】（外国語活動）・外国語科における「深い学び」を以下のように考えた。

外国語（英語）を手段の一つとしてコミュニケーションを楽しみ（他者とつながり）、生活や他教科等の学習にも生かし、発揮しようとする学び

イ 子どもと共に学びをつなぐくすのき学習【国際】（外国語活動）・外国語科の授業

くすのき学習【国際】【外国語活動・外国語科】において、子どもと「学習材」「他者」「自分自身」をつなぎ、英語を用いて表現することは、自分らしくコミュニケーションを図ろうとすることにつながると考える。

外国語活動・外国語科における題材は、それだけを見ると、とても簡単なものであり、子どもにとっては、意欲や興味を喚起させるものではない。その題材を英語で行うことがまず重要となってくる。また、決められた表現の単なる反復練習をさせるのではなく、伝え合う目的や必然性のあるコミュニケーションを行わせることで、子どもは意欲的に「学習材」とつながろうとするであろう。その「学習材」を基に、「他者」とつながる。相手の意向を理解し、互いの思いを伝え合うことで、友達のことを分かってよかったと感じながら、「他者」と積極的にかかわろうとする。そして、そのやり取りや振り返りを通して、自分の成長や変容を見詰め直すことで、「自分自身」とつながる。英語で自分のことが伝わってよかったという充実感を味わうことで、「自分のことを伝えたい」「友達のことを知りたい」と他教科等や自分の生活においても生かそうとすると考える。

また、くすのき学習【国際】においては外国語活動及び外国語科の学習を生かす場として交流学習を設定する。外国の人との交流学習に向けて、英語の語彙や表現を習得したり、活用し

たり、伝えたい内容を探究したりして、学習過程で子どもが自ら課題を見付けて解決に導こうとするなど、子どもの学びの場の広がり期待できると考える。そして、友達と協働しながら、異文化を理解し、外国の人（「他者」）との交流活動を通して、自分自身のよさに気付くであろう。このように子どもと「学習材」「他者」「自分自身」がつながるよう手立てを講じることで、他教科等や自分の生活の中で、自分らしくコミュニケーションを図ろうとしていくと考える。

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て（学習材・他者・自分自身）

ア 学習材とつなぐ手立て（主に「見方・考え方」との関連）

くすのき学習【国際】で、オーストラリアやカナダなど、外国の人との交流を設定し、コミュニケーションの目的や場面、状況等を示すことで、英語でのコミュニケーションに必然性を与え、子どもの外国の人と交流したいという気持ちを高めることができる。また、A L Tの国の話を聞き、自分の国との相違点について考えたり、A L TとJ T Eのコミュニケーションモデルを見たりすることで、子どもたちは交流の見通しを持ち、「自分のことを伝えたい」「交流が楽しみだ」といった意識を顕在化させる。自分のことを伝えたいという気持ちが高まることで、教師の示す言語材料だけでなく、新たに「こんなことを言ってみたい」「こんな表現ができるのではないか」と自然と子どもたちから出てくると考える。交流に対する期待感、子どもの心の動きであり、英語を使った表現を意欲的に学んだり、楽しんだりしようとする活動が期待される。

イ 他者とつなぐ手立て（主によりよい「対話」の在り方・方法）

「追究」の場面においては、言語活動を重視した活動を行う。言語活動とは、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」と定義されている。そこで、多様な考えや意見が出るテーマや考え、気持ちを伝え合う場を設定することで、友達と自然とコミュニケーションを図ることができる。そして、「友達のことが分かってよかった」「友達のことをもっと知りたい」など、互いの考えや思いを伝え合い、自分の考えや学び方に変化が生まれてくる対話的な学びを行うことで、「他者」とつながりたいという気持ちが高まるであろう。そのためには、自信を持って言語活動に取り組めるようにすることが大切である。子どもが互いの考えや思いを伝え合うための言語材料を聞いたり話したりする時間を十分に確保する必要がある。

また、「追究」の場面は、学級やグループなどの集団での学びを大切にしながら、「外国の人と交流する」という目的に向かって活動する場面でもある。学級集団として交流学习を成功させるためには、自分が伝えたいことを英語で話すだけでなく、友達と協力して手際よく発表する練習をしたり、交流に必要な準備を行ったりするなど、「他者」と英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする姿が表出すると考える。

ウ 自分自身とつなぐ手立て（主に自覚のための自己評価の方法、過去・現在・未来）

学びの中で、子どもと「自分自身」をつなぐためには、自分らしくコミュニケーションを図れたかどうかを実感させることが大切である。そのために、子どもの発表や振り返りの記述の中から、「英語を用いてコミュニケーションができたか」「学習を楽しめたか」などについて見取る。また、共に学習を進めてきた友達との相互評価や、A L Tからの評価など、多面的な評価も行う。特に、A L Tからの評価は英語を用いて学習を行う外国語活動・外国語科において、「A L Tに英語が伝わってよかった」「もっとA L Tと話してみたい」という気持ちを高めることができると考える。また、交流活動においても同様に、「もっと交流をしてみたい」と次の交流活動を楽しみにするとともに、異文化に接することで、日本のよさを再認識したり、自分の成長や変容を自覚したりすることができる。と考える。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における（指導者）評価

ア 評価の視点

私たちは子どもの

外国語（英語）を手段の一つとしてコミュニケーションを楽しみ（他者とつながり）、生活や他教科等の学習にも生かし、発揮しようとする姿

を目指して、授業づくりを進めている。そのために、次の二つの視点で、子どもを評価していく。

- ・ 異文化を持つ人ともコミュニケーションを楽しんでいる。
- ・ コミュニケーションの目的や場面、状況等に応じて、既習の英語表現を用いようとしている。

イ 評価の具体的な手立て

(7) 空間軸から見た手立て

様態観察・ワークシート・成果物・振り返りシート等を手立てとして、多角的・客観的に子どもが何ができるようになったかを見取り、指導の改善につなげる。

様態観察では、教師はやり取りの様子から子どもの理解度や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、子どもがどのような場面でどのような英語を用いているかなどを総合的に評価する。

ワークシート・成果物では、子どもたちが出来上がった物を振り返り、自分の学び方を客観視することで、次のステップに進むために自分に必要なことを考えることができるようになる。また、これらをまとめてポートフォリオとして持っておくことで、いつでも既習の表現を振り返り、相手や目的に合わせて活用できると考える。

(4) 時間軸から見た手立て

単元の始めに、交流活動についての見通しを持ち、これからの学習を進めていく上で必要な知識・技能について知る。また、学習過程において、定期的に自分の目標に対する到達度を確認させたり、交流活動後には、「分かったこと」「自分にできるようになったこと」を振り返らせたりする。このことにより、外国語活動・外国語科で体験的に理解したことを、実際に活用できてよかったと感じさせたい。また、もっとコミュニケーションを図りたいという気持ちを育ませたい。

(ウ) 自己評価

毎時間、振り返りシートによる自己評価を行う。数値による自己評価や自由記述による振り返りで、本時の目当てに対する達成度や理解度を把握する。また、単元を通して行うことで、自分の成長を実感したり、教師がその変容を子どもにフィードバックしたりすることで、これからの学習に主体的に取り組むことができる。また、他者評価を行い、コミュニケーションに関するよい点を考え、友達のよさを自分に生かそうとしたり、自分のよさにも気づき、自信につなげたりしたいと考える。

（和田 清寛）